

「当事者活動」に対する「語られ方」の変遷**ーセルフヘルプ・グループからピア・サポートへー**

○ 首都大学東京大学院 津久井 康明 (007039)

キーワード：セルフヘルプ・グループ、ピア・サポート、当事者研究

1. 研究目的

1970年代に欧米で展開された「セルフヘルプ・グループ」の研究は、わが国においても1980年代後半から活発化してきた。「セルフヘルプ・グループ」は、従来型の専門職による援助では果たしきれない役割を担う存在として、基本的に積極的な評価を受けてきた(久保 1998)。一方で、近年では「ピア・サポート」という概念への関心が高まりつつあり、これに関する研究も増えてきている(伊藤 2013)。また、浦河べてるの家の活動を端緒として、当事者の語りや「当事者研究」にも注目が集まっており、岡(2009)による「当事者福祉論」の提起などもなされている。

これらの用語は、いずれも「当事者」による活動であるという共通点を持ちつつも、その視点に大きな違いがある。本研究の目的は、その概念整理や社会的背景を考察していく前提として、これらの用語の使用状況の変遷をたどり、当事者活動がどのように語られてきているのかについて明らかにすることである。

2. 研究の視点および方法

上記の目的を達成するため、国立情報学研究所学術情報ナビゲータ CiNii Articles を用いて学術論文を中心とした論文情報を検索し、その内容を分析する。具体的な検索方法としては、「セルフヘルプ・グループ」(「自助グループ」を含む)、「ピア・サポート」に加え、「当事者研究」、「サポート・グループ」、「当事者団体」、「当事者組織」といった当事者活動に関連する語をキーワードとして、論文のタイトルを対象とした検索を行う。同時に、出版年を5年ごとに区切って指定することにより、それぞれの用語の使用状況の変遷の概要を確認する。

なお、1990年以前は全体的に数が少なかったため、「1990年以前」としてひとつの枠にまとめている。また、1990年以降は5年ごとに区切っているが、「2010年～」は5年に満たないため、他に比べると少なめの数値が出ることに留意が必要である。

3. 倫理的配慮

本研究は調査を伴わない文献研究であり、プライバシーの侵害等についての問題はないが、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」を遵守している。

4. 研究結果

表 文献検索の結果

	1990年以前	1990年～	1995年～	2000年～	2005年～	2010年～	合計
セルフヘルプ・グループ	11	17	97	150	129	68	472
ピア・サポート	1	0	7	80	210	171	469
サポート・グループ	0	0	9	43	57	47	156
当事者研究	0	0	0	18	29	55	102
当事者団体、当事者組織	1	2	7	10	23	35	78
合計	13	19	120	301	448	376	1277

検索日 2014/07/31

まず、当事者活動に関する研究を全体としてみると、1990年代以降、「合計」が大きく増加しており、この領域の研究が活発化してきていることが伺える。その上で、さらに以下の点を指摘することができる。

「セルフヘルプ・グループ」については、他の語に比べて早くから使われており、2000年代前半までは圧倒的なシェアを占めていた。しかし、他の語がそれ以降も増加傾向にあるのに対し、「セルフヘルプ・グループ」だけは、2000年代前半を頂点として、その後、減少に転じているのが特徴的である。

「ピア・サポート」については、1990年代後半に登場し、2000年代に急速に使用が広がった。2000年代後半には「セルフヘルプ・グループ」と入れ替わるように第1位となり、現在に至っている。

5. 考察

上記の結果と各研究の内容についての分析により、当事者の組織としての活動に焦点を当てる「セルフヘルプ・グループ」から、組織にはとらわれずに広く当事者の相互行為に着目する「ピア・サポート」へと、当事者活動の「語られ方」が変遷していったことが明らかになった。また、その要因としては、当事者活動の活動形態の変化が影響していることが示唆された。

なお、当日は、それぞれの研究の焦点や主張について、より詳細な報告を行う。

主要文献

- 久保絃章（1998）「セルフヘルプ・グループとは何か」久保絃章・石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規，2-20.
- 伊藤智樹（2013）「ピア・サポートの社会学に向けて」伊藤智樹編著『ピア・サポートの社会学』晃洋書房，1-32.
- 岡知史（2009）『「当事者福祉論」とは何か：当事者の福祉活動への参加を支援する福祉学の可能性』日本社会福祉学会第57回全国大会 <http://pweb.sophia.ac.jp/oka/papers/2009/sw/>